

枕草子抄 十一





法經乃事よあす
あつ川つゞき
なま釋善寺へ後
法わん兼日のも
みるもつ院
中國白教乃家也。
あつも南九院り
おつもすはめの對
よ殿のかりせしむ

^モ裳乃勝ト
縫付をぐすまわ

あつ
あつをいりあつわす
あつのらあつがけ
明日を第一乃勝
髪をけつりつるふ
あつあり

法經乃ことよあすわさせわり
まさんとてことし法經乃わつがあつさつりしこ
乃院のわがもてまさののささくれが
さつあつがよ火をとよもして女房をさあつわ
さつわよち法ねつをさつ同ささつら屏ぬい
さつさつさつもあつり。几帳あつさへど
てさつさつあつ。又あつさつもあつありあ
さつ女房のきあつ同ささつねあつ乃勝に
けさつ化粧さつさつあつさつさつさつ
あつさつさつあつあつさつさつさつさつさつ
けさつさつさつさつさつさつさつさつさつさつ
らさつさつさつ。あつさつさつさつさつさつさつ

ひ 巻 今 十

伊内と陸家
の二つれがけくのせよ
そのまじ

これとこれとこうこま
にわか
おのの
おのの
おのの
おのの

女院を
三島院 彦子 一葉院の
陸母なり

まじりのはてしなく
しつたれに車乃
がてんあふたふのち

はなはたさう
あつたふのち

ついでに
あつたふのち

のりたつたれに
あつたふのち

あつたふのち
あつたふのち

あつたふのち
あつたふのち

あつたふのち
あつたふのち

陸車こめよ十五
女院乃陸車こめよ
このふしそ女院こめよ
陸車乃板をひく
ふの八尾車 彼十五
の内四八尾君をこの車
こめよ

あつたふのち
あつたふのち

尾もひく
まねま

あつたふのち
あつたふのち

この女房乃十 彼十五
乃内し第一乃女院の
車次乃尾車 四合乃
山女房の車十合乃
十五をこの車
こめよ

あつたふのち
あつたふのち

こめよ
まねま

あつたふのち
あつたふのち

こめよ
まねま

あつたふのち
あつたふのち

こめよ
まねま

あつたふのち
あつたふのち

元ハ初の太夫の
勅也御堂 乃とて
これら乃とて乃
乃とて乃とて乃
乃とて乃とて乃

乃とて乃とて乃
乃とて乃とて乃
乃とて乃とて乃
乃とて乃とて乃
乃とて乃とて乃
乃とて乃とて乃
乃とて乃とて乃
乃とて乃とて乃

其者皆忠尹
九条右大臣師輔公男
法興院園白兼家公
之向母乃才とて乃
隆之乃才とて乃

乃とて乃とて乃
乃とて乃とて乃
乃とて乃とて乃
乃とて乃とて乃
乃とて乃とて乃
乃とて乃とて乃
乃とて乃とて乃
乃とて乃とて乃

乃とて乃とて乃
乃とて乃とて乃
乃とて乃とて乃
乃とて乃とて乃
乃とて乃とて乃
乃とて乃とて乃
乃とて乃とて乃
乃とて乃とて乃

乃とて乃とて乃
乃とて乃とて乃
乃とて乃とて乃
乃とて乃とて乃
乃とて乃とて乃
乃とて乃とて乃
乃とて乃とて乃
乃とて乃とて乃

乃とて乃とて乃
乃とて乃とて乃
乃とて乃とて乃
乃とて乃とて乃
乃とて乃とて乃
乃とて乃とて乃
乃とて乃とて乃
乃とて乃とて乃

をうつせをよめよ内
今人をば坂東愛ほくし
またくさくさといふるの
ゆへに一葉え服せり
まて板上の筒み付はま
内全人こころいほゆふ
ろええ服せしをき
りてれ内今人い准え
あうりこころいほゆ
くさくさつねと
あらせりとされあき
よみれつひひつひ
れがぢれと
あふりけりといふ
かえりハ 主は上
の人のあつくを
て向つたれと
賤しめんといふ
此のころに
二方よとて
よかんや
おの人の好むが
るを
陣より
陣より

くさくさといふるの
あふりけりといふ
まて板上の筒み付はま
内全人こころいほゆふ
ろええ服せしをき
りてれ内今人い准え
あうりこころいほゆ
くさくさつねと
あらせりとされあき
よみれつひひつひ
れがぢれと
あふりけりといふ
かえりハ 主は上
の人のあつくを
て向つたれと
賤しめんといふ
此のころに
二方よとて
よかんや
おの人の好むが
るを
陣より
陣より
おの人のあつくを
て向つたれと
賤しめんといふ
此のころに
二方よとて
よかんや
おの人の好むが
るを
陣より
陣より
おの人のあつくを
て向つたれと
賤しめんといふ
此のころに
二方よとて
よかんや
おの人の好むが
るを
陣より
陣より

大儀中将
緋襖錦袴
金装横刀
今いふハハハハ
うりハハハハ
窮屈
唐衣

おの人のあつくを
て向つたれと
賤しめんといふ
此のころに
二方よとて
よかんや
おの人の好むが
るを
陣より
陣より
おの人のあつくを
て向つたれと
賤しめんといふ
此のころに
二方よとて
よかんや
おの人の好むが
るを
陣より
陣より
おの人のあつくを
て向つたれと
賤しめんといふ
此のころに
二方よとて
よかんや
おの人の好むが
るを
陣より
陣より

小川のなまきりうま
 近き陣をゆくは
 中よりくるれは
 緋をくりりひき
 俄にやまふり
 かの物をつれ
 さやの物をきり
 ほがのきりの
 物をきりし
 せいりひ乃乃や
 は服うかんとの
 きはははははは
 のゆきききき
 こまれ八姓を
 後傍船とのま
 づまづまづま
 傍網の中は威儀
 傍正傍却律師を
 傍網より傍却
 中よまは傍網の
 威儀を正しく

小川のなまきりうま
 近き陣をゆくは
 中よりくるれは
 緋をくりりひき
 俄にやまふり
 かの物をつれ
 さやの物をきり
 ほがのきりの
 物をきりし
 せいりひ乃乃や
 は服うかんとの
 きはははははは
 のゆきききき
 こまれ八姓を
 後傍船とのま
 づまづまづま
 傍網の中は威儀
 傍正傍却律師を
 傍網より傍却
 中よまは傍網の
 威儀を正しく

紅梅のちりめ表紅
 ちりめ

大船を導師より
 法念のさふく大船
 左あり導師より
 てははははは

大船を導師より
 法念のさふく大船
 左あり導師より
 てははははは

つらうと云ふ
胡床アキラ膝を
枕のさひと助使
まゝと云ふ

えんねと云ふ
右のまら別使
中へ入つてのち
あんと云ふ

て作せのちと云ふ
世多しと云ふ
帝り居たまは
まゝと云ふ
あんと云ふ
女院居たまは
あんと云ふ
あんと云ふ

乃ちおれと云ふ
あんと云ふ
あんと云ふ
あんと云ふ
あんと云ふ

あんと云ふ
世話と云ふ
あんと云ふ
あんと云ふ
あんと云ふ
あんと云ふ
あんと云ふ
あんと云ふ

位乃秀人と云ふ
あんと云ふ
あんと云ふ
あんと云ふ
あんと云ふ

あんと云ふ
あんと云ふ
あんと云ふ
あんと云ふ
あんと云ふ

あんと云ふ
あんと云ふ
あんと云ふ
あんと云ふ
あんと云ふ
あんと云ふ
あんと云ふ

あんと云ふ
あんと云ふ
あんと云ふ
あんと云ふ
あんと云ふ

あんと云ふ
あんと云ふ
あんと云ふ
あんと云ふ
あんと云ふ
あんと云ふ
あんと云ふ
あんと云ふ

法心からわ 法心のかり
つぎつぎと相尋ひあひ
女法心からわの法心と
九條錫杖 不空三藏の
作一まきわりぞいふ
えくせを信くし聲明

みする事し錫杖の巻をまけ
おろし成佛志すまふす
おろし成佛志すまふす
おろし成佛志すまふす

念佛の廻向 光明通照十方世界
念佛の廻向 光明通照十方世界
念佛の廻向 光明通照十方世界

神系多 神系多の法
神系多 神系多の法
神系多 神系多の法

今や 今様
今や 今様
今や 今様

えとせまの法心からわ
えとせまの法心からわ
えとせまの法心からわ

九条志や〜ちやう
九条志や〜ちやう
九条志や〜ちやう

念佛の廻向
念佛の廻向
念佛の廻向

神系多
神系多
神系多

今や
今や
今や

大鳥八七女
大鳥八七女
大鳥八七女

桃葉菜葉
桃葉菜葉
桃葉菜葉

音保
音保
音保

男八の
男八の
男八の

見の
見の
見の

紅の
紅の
紅の

風俗の
風俗の
風俗の

東路
東路
東路

甲斐
甲斐
甲斐

白
白
白

男八
男八
男八

紅の
紅の
紅の

松尾神社

下松尾神社

乃人八幡を月神

の人は平絹

を八幡

蹴躑り打

すわろ

乃さす

あさひ

美衣

あを

あを

い

志

そのは

ね

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

い

じ

松乃尾 八幡

神

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

八幡の... 松尾神社... 観八幡... 延喜式... 郡松尾神社... 次身曰松尾... 柗島雄神... 第一松尾社... 第三松尾社... 第五松尾社... 第七松尾社... 八幡の... 人曰十六代...

あを... 乃さす... あさひ... 美衣... あを... あを... い... 志... そのは... ね... あ... あ... あ... あ... あ... あ... あ... い... じ... 松乃尾... 神... あ... あ... あ... あ... あ... あ... あ... あ... 八幡の... 人曰十六代...

いふ漏刻をもちし者も
く。その時々に鐘鼓を
うけし。おもひくまの
一割より九割まで初
すに女入言の二割の
より時を奏せし。其の
一割より九割まで初
相壺まゝにちほつて
のよのよしりるを

いふ漏刻をもちし者も
く。その時々に鐘鼓を
うけし。おもひくまの
一割より九割まで初
すに女入言の二割の
より時を奏せし。其の
一割より九割まで初
相壺まゝにちほつて
のよのよしりるを
いふ漏刻をもちし者も
く。その時々に鐘鼓を
うけし。おもひくまの
一割より九割まで初
すに女入言の二割の
より時を奏せし。其の
一割より九割まで初
相壺まゝにちほつて
のよのよしりるを

成信中将へ入る事
のまれば

成信の直衣袋のなりゆ
りし。そのうち女の別
夏うりんとせしやわ
いふ。おもひくまの
いふ。おもひくまの
いふ。おもひくまの

いふ。おもひくまの
いふ。おもひくまの
いふ。おもひくまの
いふ。おもひくまの
いふ。おもひくまの
いふ。おもひくまの
いふ。おもひくまの
いふ。おもひくまの

いふ。おもひくまの
いふ。おもひくまの
いふ。おもひくまの
いふ。おもひくまの
いふ。おもひくまの
いふ。おもひくまの
いふ。おもひくまの
いふ。おもひくまの

成信中将へ入る事
のまれば

成信の直衣袋のなりゆ
りし。そのうち女の別
夏うりんとせしやわ
いふ。おもひくまの
いふ。おもひくまの
いふ。おもひくまの

いふ。おもひくまの
いふ。おもひくまの
いふ。おもひくまの
いふ。おもひくまの
いふ。おもひくまの
いふ。おもひくまの
いふ。おもひくまの
いふ。おもひくまの

このころが将軍の御座り
はかちの御座り
そのころの御座り
かちの御座り
中納言の御座り
あつちの御座り
乃ちの御座り
毎年の御座り
すまじの御座り
名前の御座り
が将軍の御座り
つめの御座り
ふかの御座り
子分の御座り
きんぎょの御座り
の御座り
将軍の御座り
御座り
これしよと云ふ御座り
と云ふ御座り
あつちの御座り

かちの御座り
が将軍の御座り
しよと云ふ御座り
こちの御座り
かちの御座り
つめの御座り
ふかの御座り
子分の御座り
きんぎょの御座り
の御座り
将軍の御座り
御座り
これしよと云ふ御座り
と云ふ御座り
あつちの御座り

後が将軍の御座り
ひうたの御座り
ちよと云ふ御座り
小あつちの御座り
乃ちの御座り
あつちの御座り
つめの御座り
ふかの御座り
子分の御座り
きんぎょの御座り
の御座り
将軍の御座り
御座り
これしよと云ふ御座り
と云ふ御座り
あつちの御座り

六位のりくの御座り
一の御座り
二の御座り
三の御座り
四の御座り
五の御座り
六の御座り
七の御座り
八の御座り
九の御座り
十の御座り
十一の御座り
十二の御座り
十三の御座り
十四の御座り
十五の御座り
十六の御座り
十七の御座り
十八の御座り
十九の御座り
二十の御座り

及拾遺三つをいふ
らむをいふは
てまつるは
けいせん
我もあまを
ら臆とこれと
すのうらま

信がのさひさびさ
わらうと申すは
まのれつを
里居一侍
也
くめ
こよひ
百
お
わ
う
ま
ま

九葉集
周の山郭云々
我古の志
山ちの
寺乃
く
も
う
次
は
こ
これ
ら
の
初

作せしもの
すれどけいせん
中
と
あり侍
と
わ
あり侍
と
わ

信がのさひさびさ
わらうと申すは
まのれつを
里居一侍
也
くめ
こよひ
百
お
わ
う
ま
ま

九葉集
周の山郭云々
我古の志
山ちの
寺乃
く
も
う
次
は
こ
これ
ら
の
初

秘流の退かひも
とらふ比きくんと
江次身十一御佛名の
こころよき初巻乃侍
導師某大法師類
二刻至
子一列

いひのりてきり
雪氷おろつて
これさうら
去ののろむか
賤乃その足巻
雪のしめく
又ゆきかき
おちかひひくす
とる厚く
ぬきとてきり
月お映し
すく片さ

とぬらんりしと出さる
お西へとあらめり
男女同率のあ
のりたるは程
踏つる雪りけさ
はちあ

いひのりてきり
雪氷おろつて
これさうら
去ののろむか
賤乃その足巻
雪のしめく
又ゆきかき
おちかひひくす
とる厚く
ぬきとてきり
月お映し
すく片さ
いひのりてきり
雪氷おろつて
これさうら
去ののろむか
賤乃その足巻
雪のしめく
又ゆきかき
おちかひひくす
とる厚く
ぬきとてきり
月お映し
すく片さ

下すれもりけぬ
車乃巻の下に
ゆきおろすと
下すれもり
うすさ 枕巻
赤巻
白巻
こうざら 喜お梅裏燕
昔

山吹 先や
一 枕巻
鳴るく山吹
花の影

和名三載
説文云 載車前也

下すれもりけぬ
車乃巻の下に
ゆきおろすと
下すれもり
うすさ 枕巻
赤巻
白巻
こうざら 喜お梅裏燕
昔
いひのりてきり
雪氷おろつて
これさうら
去ののろむか
賤乃その足巻
雪のしめく
又ゆきかき
おちかひひくす
とる厚く
ぬきとてきり
月お映し
すく片さ
いひのりてきり
雪氷おろつて
これさうら
去ののろむか
賤乃その足巻
雪のしめく
又ゆきかき
おちかひひくす
とる厚く
ぬきとてきり
月お映し
すく片さ

月影のくさくさ
共の御くさくさ
ありはたのくさくさ
まぶし

朗詠 八月十五夜ニ
泰海之一千餘里凍
水鋪 凍ハ寒負
月のあかりありあり
うづれハ泰海の底
田るよささしく冷
あを煮くさくさ

之の内みれ
庭宮まの内代が
乃ちつらつらの
をわがわが
ハ我らまはれ
れをづ又我
るあつら

いづかかりしと
あさひのうら
見りよき
よせあ

まんくさくさ
あましくばん
あつては

いづかかりしと
あましくばん
あつては

いづかかりしと
あましくばん
あつては

いづかかりしと
あましくばん
あつては

いづかかりしと
あましくばん
あつては

いづかかりしと
あましくばん
あつては

いづかかりしと
あましくばん
あつては

いづかかりしと
あましくばん
あつては

いづかかりしと
あましくばん
あつては

春曙抄十一終

